

とまこまい びじゅつかん
苫小牧の美術館の

みりよく つた
魅力を伝える

ぴとごま

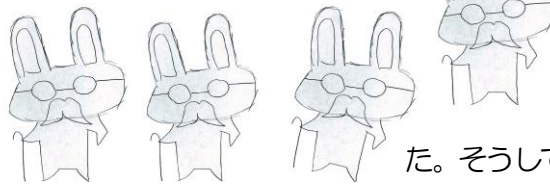
第8号

合併特刊号
2014年2月号

とまこまいこうかいこう しゅうねんきねんきかくてん
苫小牧港開港 50 周年記念企画展

夢を形に

すなはま げんや じだい
～砂浜と原野にいどんだ時代～



苫小牧港は世界初の人工の港です。

1951年に苫小牧の方々が港を使ってフェリーや荷物が運べる船を出したいということで作りはじめました。

そうして1963年完成しました。

機械を使い、砂が動かないところを調べて、その結果、10mほど、ほったそうです。港をほったら、砂が残ります。その砂は、沼などにうめ立て、人がすめるようにしたそうです。苫小牧港は、北海道で一番の貿易港でもあります。(浜 明日美)

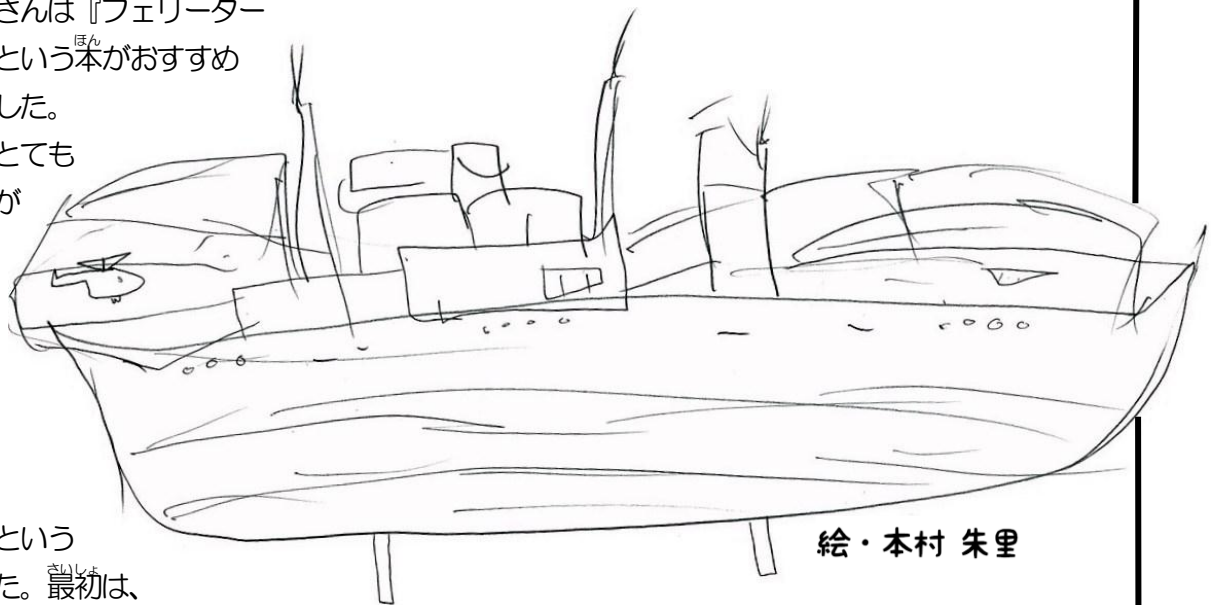
『夢を形に～砂浜と原野にいどんだ時代～』は、苫小牧港が今年で50周年をむかえたという記念の展示会です。港の出来るまでを分かりやすく解説していました。

苫小牧港はもともと砂浜でイワシ漁がさかんでしたが、港を作って、船を出せばもっとイワシが取れるということで作り始めたそうです。そのうちに漁業から工業へ発展していったそうです。苫小牧港は砂浜を掘り込んで作った港だそうです。これは世界初だそうです。

学会員の武田さんは『フェリーターミナルの1日』という本がおすすめですと言っていました。

苫小牧港にはとてもめずらしい技術が使われていてすごいなと驚きました。

(的場 翔)



絵・本村 朱里

苫小牧港は「内陸掘込式」という

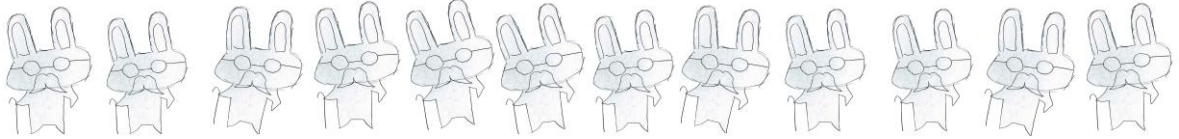
方法で作りました。最初は、

技術やお金がないということで難しいと思われていましたが、多くの人々の努力で完成したと聞きました。

展示室には、中村さんの作った船があり、なんと動くと言いました。中にエンジンが入っていて、走っている写真は、本物さながらでした。(望月 王翔)

私は苦小牧の港の事を学校で学んだ事がありますが、今日始めて知った事でおどろいた事は、ほった土が沼地だった苦小牧の土地に入れられて、今みたいな地面になったという事です。色々な事を初めて知った時は、とても楽しいので、もっと色々な事を学びたいです。(阿部 萌夏)

写真がたくさんあった。船の船長さんは、世界に行く。舟のもけいがたくさんあって、動くそうです。内陸ほりこみ港は苦小牧が最初だったそうです。フェリーターミナルのことがたくさんかいてあった本がありました。船が走っている写真があって、本物かと思ったら、もけいが走っているといわれてびっくりしました。船のもけいは、すごかったです。(阿部 天翔)



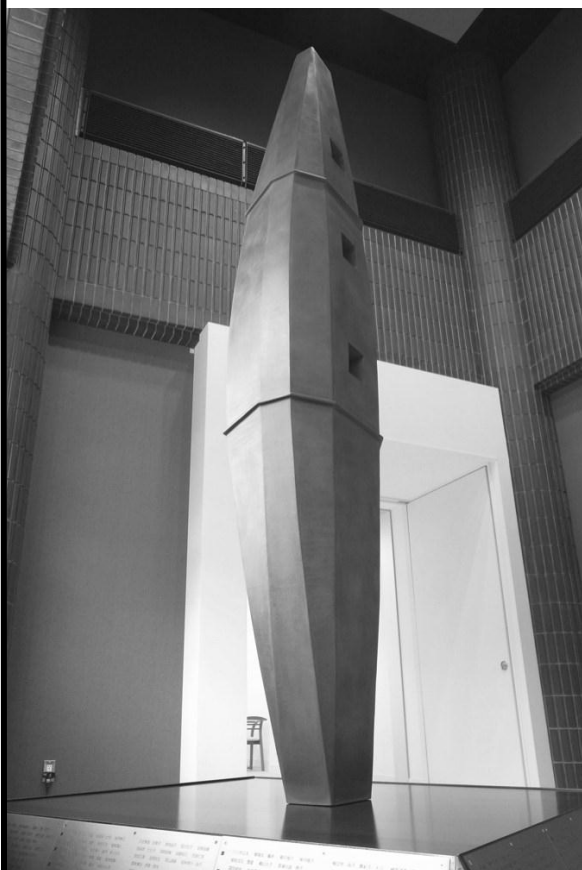
レオさんといっしょに レオさんの作品を 見てみよう！！

苦小牧市美術博物館のロビーには市民から寄贈された彫刻「パサーージュ」が展示されています。9月14日から11月3日までは、中庭展示スペースに「不在の存在」が展示されました。二つの作品を作者の藤沢レオさんといっしょに鑑賞しました。

藤沢レオさんは、いろいろな作品を作り、みなさんに公開しています。レオさんが作った作品を、2つ見学させていただきました。

1つ目は、『パサーージュ』という彫刻の作品です。鉄でできていて、びっしり立っています。工夫は、鉄がサビるごとに、鉄も生きているのを、伝えようと作ったそうです。考えるのに1年、作るのに3ヶ月もかかったそうです。

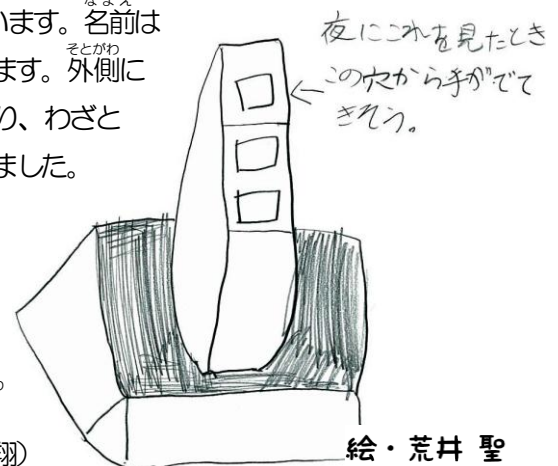
2つ目は、『不在の存在』という、糸を使った作品です。糸は150メートルで600円の水糸を何個も何個も使ったそうです。工夫はピンク色で目立たせ、その日の風の様子が分かる作品となっています。(浜 明日美)



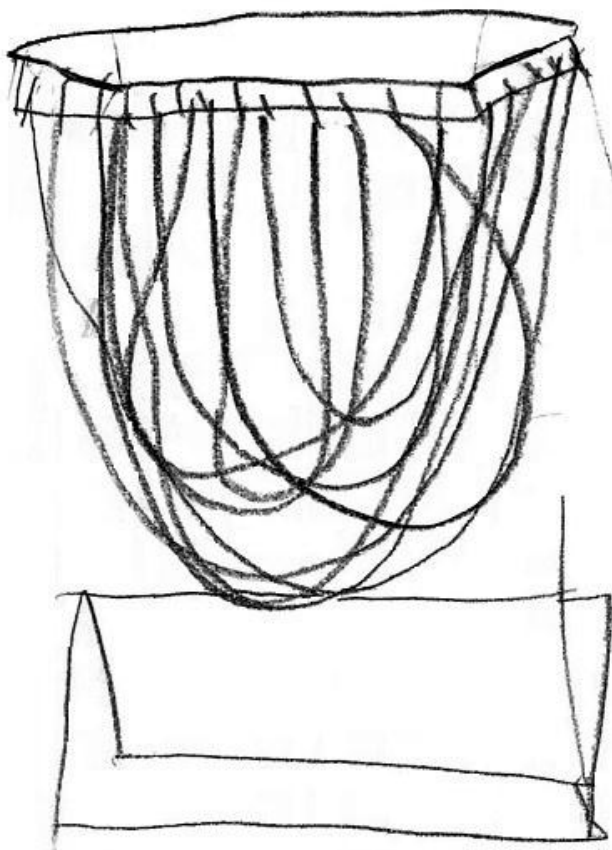
中庭にある作品『不在の存在』は「水糸」という糸でできています。水糸とは、家を建てるときに使われる糸で弾力がある糸です。

彫刻は鉄でできています。名前は『パサーージュ』といいます。外側には鉄の板がはられてあり、わざとさびさせていると聞きました。

「たね」をモチーフにしている、さびさせたのは「鉄は時間がたつとさびてしまう」ということで「時間」を表しています。(望月 王翔)



絵・荒井 聖



藤沢レオさんの作品を二つ見学しました。

一つ目は、『パサーージュ』という作品です。パサーージュはフランス語で意味は通路だそうです。イメージとしては種や人などだそうです。人として考えると作品に空いている穴は人の体の中の脳、心臓、おなかの中の臓器を表しているそうです。作品に使っている材料は鉄で茶色く見えるのはさびさせているからだそうです。僕は木だと思っていたので、とても驚きました。

二つ目は、『不在の存在』という作品です。僕はこの作品の意味が最初よく分かりませんでした。理由は作品の題名の意味が全く逆のことだからです。レオさんに聞くと重力などのことで、あることは分かっている目には見えないような身近なことを表しているそうです。作品の材料はピンク色の水系です。一つ目の『パサーージュ』は入口の近くに、二つ目の『不在の存在』は中庭に展示されています。(的場 翔)

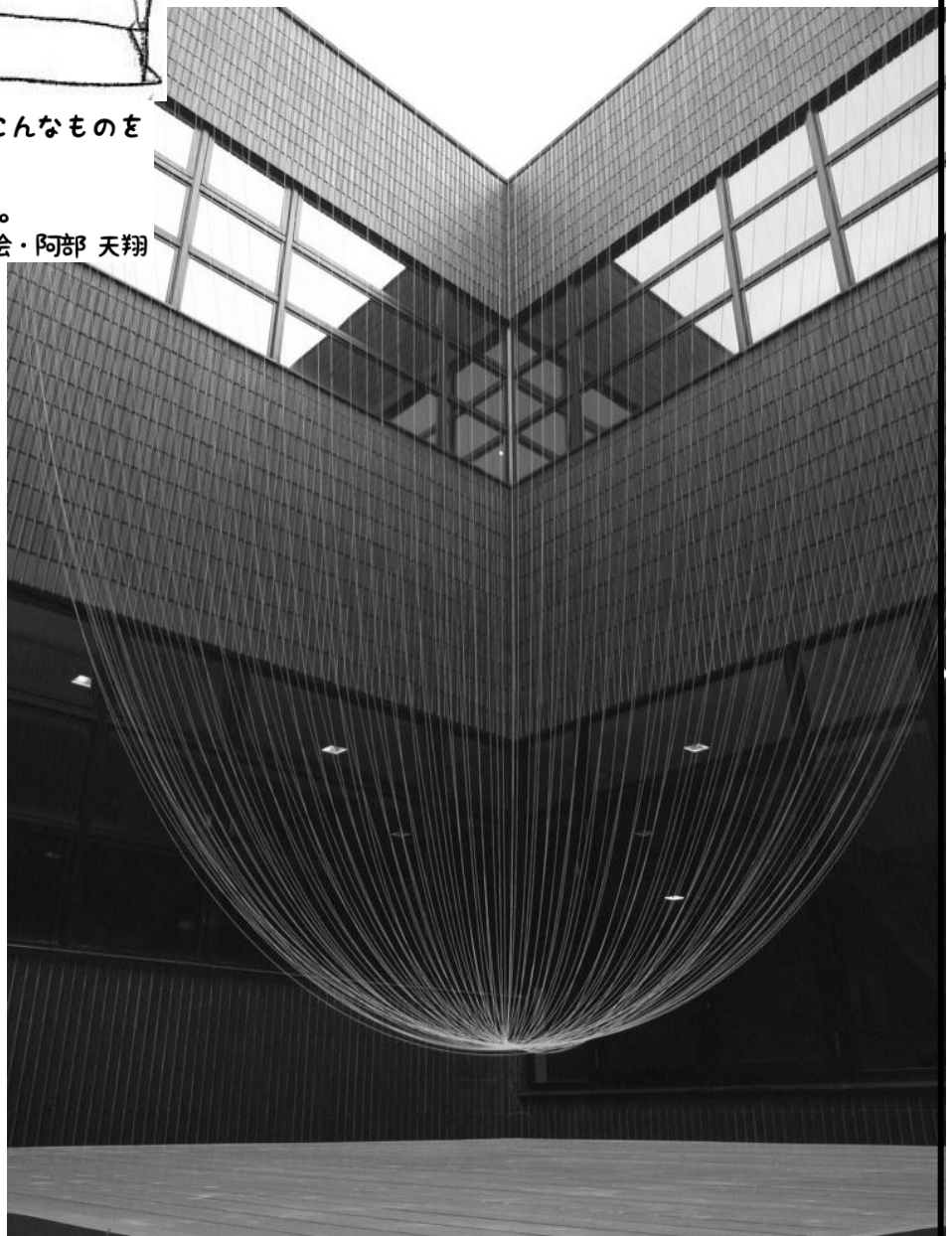
ぼくは、この作品を見て、なぜこんなものを作ったんだろうと思いました。

糸を何本もつるして作ってました。

絵・阿部 天翔

ピンク色の水系をつかっていて、150mで600円で、とにかく長くて、ハンモックみたいで、入ってみたくて、風にゆられてキレイで、名前が『不在の存在』と逆の意味で不思議な感じがした。

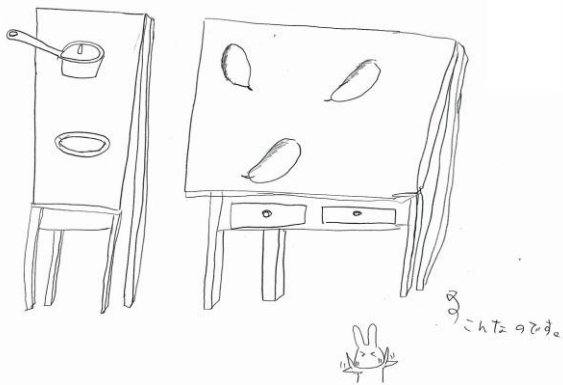
もうひとつは、だえんぽくて、ちゃいろで、サビてて、手にサビがついて、変な感じで、不思議で、『パサーージュ』って言ってよくわかんない名前だったよ!! (本村 朱里)





第7回北海道現代具象展

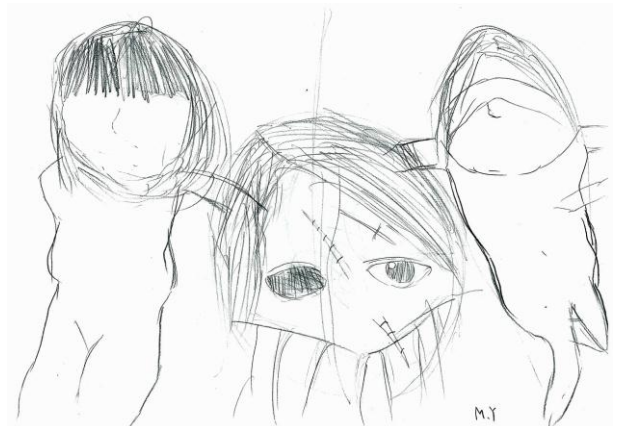
12月15日、苫小牧市美術館で開催中の企画展「北海道現代具象展」(2013年12月10日~23日)を取材しました。



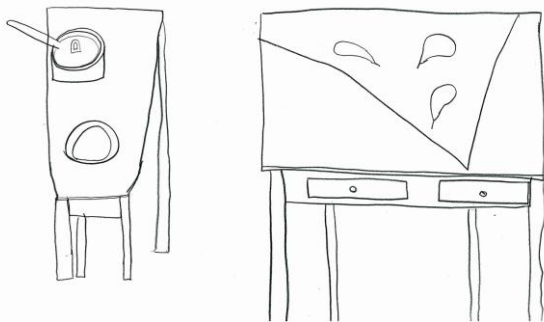
私が見た絵の中で一番気に入った物は笠井誠一さんの『二つの卓上静物』という作品というものです。理由は見ためはかんたんそうだけど、自分でかいてみるとけっこうたいへんでした。ただフルーツの絵と、なべと皿があるだけだと思ったけどバランスなどで、けっこうてこずりました。

ほかにも人物をそのまま、そっくりにかいている絵や、風景画などもありました。(本村 朱里)

私は、高橋正敏さんの『地上—パンドラの供物を—』が気に入りました。ちなみに「具象」とは物のかたちという意味があるそうです。なぜこの絵が気に入ったかということ、赤と黒で、はっきりしていたからです。他の作品は、あまり、はっきりしていなかったけれど、この作品は、はっきりしていてわかりやすかったです。作者の高橋さんは、小学5年生のころに画集を買ってもらって見たところ、ゴッホが好きになったそうです。私もゴッホが好きなのでびっくりしました。高橋さんは、「子供のころに思った事を思いつづければ叶うはず」といっていたので私も思った事、感じた事を忘れずに思いつづけようと思いました。(山本 舞羽)



『二つの卓上静物』。私は、この作品が最初ひまつぶしでかいた絵みたいだなあと思いました。でも美さいにかいてみるとけっこうむずかしかったです。(千葉 心美)



12/15は、第7回北海道現代具象展を見ました。私が好きな作品は高橋正敏さんの『地上一パンドラの供物をⅡ一』という作品です。真っ赤な色が印象的です。(浜 明日美)



かっこいい絵をかく高橋正敏さんは「自分のきもちや思ったことを絵にしていた。」そうです。(荒井 聖)

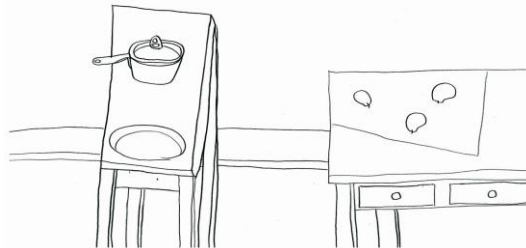
僕は興味があった作品が2つありました。1つ目の作品は高橋正敏さんの『地上一パンドラの供物をⅡ一』です。まず、見た第一の感想はどの絵よりも迫力があるなということです。高橋さんに取材をすると、したいと思ってもできないなど、今、思っている気持ちを表した作品だそうです。2つ目は伊藤光悦さんの『営業中』です。この作品には東日本大震災後の気仙沼市のヘアサロン・みなとの建物が書いてありました。絵をよく見ると1階から3階までである中で営業しているそうです。東日本大震災について教えてくれる作品だなと思いました。他にも色々な作品があり、おもしろかったです。(的場 翔)

今日見た絵の中で私がすごいと思った絵をしようかします。『営業中』という絵です。この絵は、2013年にできて、東日本大震災のところにあった、とこやの絵が描かれています。そのとこやは、大震災のあとも3階で営業をしていたということを書きました。その話を聞いた作家の伊藤光悦さんは、話に感動してこの絵『営業中』を描いたということです。(亀卦川 栞)



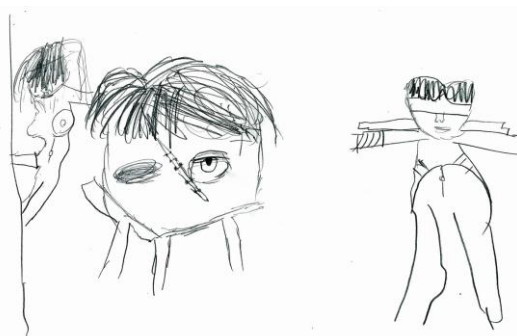
ぼくは、『営業中』という絵が気に入りました。その理由は、ひさなこともあったがそれをのりこえてがんばっている人たちもいるということがわかったからです。(荒井 楓)

私が気に入った作品は、笠井誠一さんの「二つの卓上静物」です。ほかの作品とは描き方がちがって、白や水色などの色合いや、絵がかわいくて、おもしろい作品でした。(阿部 萌夏)

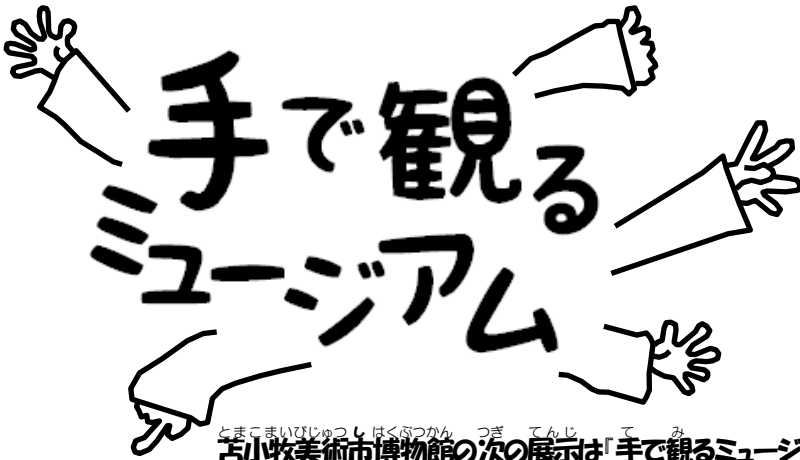


わたしは『地上一パンドラの供物をⅡ一』が好きだったです。なぜかというとなんかとてもおもしろかったからです。

『第7回北海道現代具象展』の次は『子どものための美術展』です。藤沢レオさんも作品を出品します。レオさんの作品の名前は「不在の存在」というなまえの作品です。ぜひレオさんの作品もみてください。(伊藤 なつみ)



2014年1月1日(土)～2月16日(日)までは、『子どものための美術展』が開かれました。子どもはもちろん大人まで楽しめるものでした。この美術展は、美術作品から広がる物語がテーマで、絵や木の彫刻など、レオさんの作品だけでなく、徳田幸次郎さんや河野健さんなどほかの人の作品を展示し、作品のなかにある物語などを考えてもらいました。(本村朱里、荒井聖)



苫小牧美術館の次の展示は「手で観るミュージアム」と「おはなしミュージアム」です。

普段の展示会では触ってはいけない展示がほとんどですが、「手で観るミュージアム」では、見るだけでなく手でふれながら鑑賞することができます。“自然と造形的美”をテーマに、美術作品をはじめ、アンモナイトの化石や縄文土器などを展示します。この機会に形や質感の面白さにふれてみましょう！

「おはなしミュージアム」では、「昔話」に登場する民具、動物、植物などを紹介します。この展示会では、「昔話」にでてくる「生活のようす」にスポットをあて、昔の人たちの生活をはぐくんできた環境をふりかえります。昔は当たり前に使われていながらも、今はなかなか見ることのできないモノ/ものもありますよ！

会期 2014年3月1日(土)から30日(日)

開館時間 9時30分から17時まで

休館日 月曜日

料金 一般300円(10名以上の団体料金は240円)

大学生・高校生200円(団体の場合140円)小・中学生は無料です。



2012年6月23日に始まった美術館広報部「びとこま」の活動は、1年8ヶ月が経ちました。小さかった記者たちもすっかり成長し、紙面を作る力と好奇心は膨らむばかりです。ひとりひとり文章やイラスト、写真など得意な方法で紙面を華やかに彩り、美術博物館の魅力を伝えていきます。これからも続く「びとこま」とびとこま記者の活躍を楽しみにしてください！(し)

製作：美術館広報部
 取材：荒井楓、荒井聖、亀卦川菜、千葉心美、山本 舞羽、菊池りの、阿部萌夏、阿部天翔、伊藤 なつみ、望月王翔、本村朱里、浜明日美、的場翔
 編集：樽前 arty十、小河 けい
 発行：苫小牧市美術博物館
 (お問合せ) 〒053-0011 苫小牧市末広町3丁目9番7号
 tel 0144(35)2550 fax 0144(34)0408
 HP <http://www.city.tomakomai.hokkaido.jp/hakubutsukan/>
 e-mail hakubutsukan@city.tomakomai.hokkaido.jp

(▽)/ 協力のお願ひ (▽)

「美術館広報部」の記者であることを証明するカードを提示された方は、取材へのご協力をお願いします。疑問点や確認等が必要となる場合、美術館までご連絡をお願いします。感想などメッセージをお待ちしています♪